

保育学生の子ども理解を育む取り組みに関する一考察
—子ども発見ノートを中心に—

A Study about the Practice to Promote the Understanding of
Children by Students in Early Childhood Education Course.
— Focusing on the Notebooks for Recording a Child —

山 崎 征 子
Seiko Yamazaki
小 田 義 隆
Yoshitaka Oda
上 村 晶
Aki Uemura

(要 約)

近年の保育者を目指す学生は、少子化の影響もあり、入学までの間に、職場体験などによる保育所・幼稚園体験以外に、実際に子どもに関わる経験をもつものが非常に少なくなっている。そこで、子ども学科「保育原理」の授業で、学生の子ども理解を深める姿勢を作るべく「子ども発見ノート」の取り組みを2009年度から始め、その効果に関する研究を開始している。本稿は2年間の短大生活における「子ども理解」の成長に関する縦断的研究の1年目の分析にあたる。

(キーワード)

子ども理解、子ども発見ノート、実習園評価との関連

1. 問題の所在

近年、少子化社会において、都市化などの子どもをめぐる環境の変化にともない、子どもが屋外で遊ぶ習慣が減少しつつある。これらの現象は、保育者を目指す学生が、短期大学に入学するまでに経験する子どもと接する時間の減少にも影響を与えている。実際のところ、保育系短期大学に入学する学生は、中学校・高等学校における職業体験での子どもとのふれ合いが、保育者を目指す動機となっているパターンが多く、それ以外の子どもたちとのふれ合いはほとんど皆無である。その短い体験の中で、「子どもが可愛い」「子どもと接することが楽しい」という気持ちが芽生え、保育者を志望する強烈なアスピレーションを生んでいるが、それが現代を生きる子どもたちの「子ども理解」を伴うアスピレーションかというところでもなく、中学校・高等学校生活の中で子どもとの接点は非常に少ないと言わざるを得ない。そのことが、短期大学入学後の大学とのミスマッチにつながり、「目指していたものは保育者ではなかった」「自分は本当に保育者に向いているのか」という決断や疑問から、休退学をする学生も現れ始めている。

1. 「子ども発見ノート」の概要

2-1 先行研究の概観

上述の問題を受け、「子ども理解」力を身につけた保育者を養成するためには、普段から学生が子どもたちと接する機会をもち、子どもを積極的に観察する姿勢を身につけさせることが必要である。そこで、本学において保育原理、教育原理、保育・教育実習の担当者の中で、本学が目指す保育者像を協議した際に、学生の「子ども理解」を深めることを重視していこうという共通認識に至った。その方法として、本学で過去に実践されていた「子ども発見ノート」を使った教育実践を復刻することとした。

「子ども発見ノート」の取り組みに関する先行研究としては、豊田和子・三宅啓子「保育者養成校の教育内容・方法のあり方に関する研究」があげられる。教育者（保育者）としての幼児への関心と子どもの見方を培うことに主眼を置き、その第一歩として「幼児接近」体験を位置づけている。自分のからだを通した「幼児理解」を育む取り組みとして「子ども発見ノート」を課し、そこに書かれた学生による子どもの発見の内容例や、取り組みの感想を紹介した。そして、体験的学習の成果を付設の乳幼児保育施設を持ち合わせていない保育者養成校である本学において「学生が日常的に子どもに接近・接触する機会を補う」ことができたという成果を確認している。

本研究では、「子ども発見ノート」の教育実践を復刻するとともに、先行研究における抽出された数名の学生の感想から導き出された分析より、さらに歩を進め、「子ども発見ノート」の実践に関する効果を統計学的・質的に分析し、その有効性の実証を試みたい。

2-2 「子ども発見ノート」の実践

「子ども発見ノート」の実践とは、それぞれの学生が用意した愛着のある小さなノートに「子ども発見ノート」とし（図1）、日常生活において出会った子どもに目を向け、観察したことを、そこに記録することによって、子どもを理解する姿勢を育成する取り組みである。子どもが視界に入ると自然に観察をするような保育者としての体作りを目指している。

保育・教育実習に行くまでに、子どもと接することが少ない本学の学生を鑑み、「子ども発見ノート」の実践は、子ども発見の機会を自ら作り、それを記録することにより、エピソードを保持させる実践である。子ども同士や親子関係等の様々な関わりを観察することにより、子どもの心情を推測する基礎を培うのである。

具体的な記述内容としては、①日時・発見の場所、②子どもの年齢・性別・特徴、③子どもの様子、④感想・考察で構成している。日時や発見場所を記録することにより、自分自身の子どもの発見に対する成長を確認し、保育者としての成長を振り返ることができるようにしている。



図1：学生の作った子ども発見ノート

「子ども発見ノート」による実践は、保育者としての「子ども理解」力の成長に関して、入学時から卒業までの期間を3つのステージに分けて設定している。すなわち、第1段階では、「子ども発見ノート」を通して、子どもへの興味付けを、第2段階では子どもの内面への気づきを、第3段階では保育者としての視点で子どもを見ることを到達目標に設定している（図2参照）。

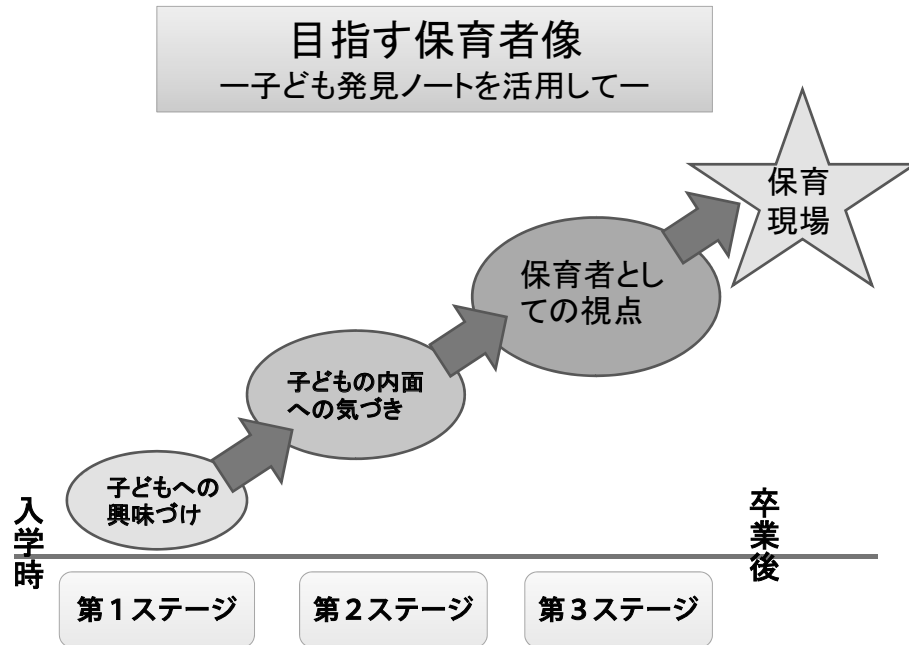


図2：子ども理解に関する3つのステージ

3. 研究の目的と方法

3-1 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。なお、本稿が取り扱う内容は2年間の短大生活における「子ども理解」の成長に関する縦断的研究の1年目の研究成果にあたる。

- ①保育者養成において保育者の資質の基本である「子ども理解」を深める「子ども発見ノート」による実践の有効性を、可視的に数値で表すこと。
- ②短大生の「子ども理解」の深化と子ども理解に関する園評価（実習評価）との関連性を分析すること。
- ③園評価ごとに学生を抽出し、その具体的記述から子ども理解に関する質的分析をすること。

本研究は、前述の先行研究における効果を数値で表すことにより、先行研究の効果を実証的に明らかにする。また、「子ども発見ノート」で得られた学生の「子ども理解」に関する数値と、実習園から回収した実習における園評価の子ども理解に関する数値との関連性も分析したい。さらに、園評価の変化

に着目した群別分析を行い、各群から抽出された学生の具体的な記述から「子ども理解」の質的分析を加える。

3-2 研究の方法

本研究の対象は、本学子ども学科1年生157名（男子3名・女子154名）であり、2009年4月から2010年3月までの間、保育原理の授業における課題の一つとして「子ども発見ノート」の記録を課した。そして、A期（4月から9月）とB期（10月から3月）に分けて、2009年10月および、2010年4月に、「子ども発見ノート」に関する質問紙調査を実施した。

質問紙調査は、㊸子ども発見ノートチェックシートと、㊹子ども発見ノートに関する自己評価の2種類からなるものである。㊸は、「子ども発見ノート」に記述したエピソード数・子ども発見場面・発見した内容の傾向を調査分析するシートである。㊹は、前述の子ども理解に関する成長に関する3つのステージと、「子ども発見ノート」の有効性に対応した以下のような評価項目とし、これらに関して4件法で自己評価させた。

- ①子どもへの興味づけ（Ⅰの1.子どもへの意識、2.視野に入る、3.関わる意識、4.探求心）
- ②子どもの内面への気づき（Ⅰの5.発達年齢、6.興味、7.行動による内面理解、8.表情による内面理解）
- ③保育者としての視点（Ⅰの9.共感、10.テーマ性、11.多角的視点、12.自己考察）
- ④子ども発見ノートの効果（Ⅱの1.書く力、2.出来事の整理、3.周囲への意識、4.周囲への注視、5.保育職への意識、6.継続性、7.有効性、8.活用性）

さらに、質問紙調査の得点と、実習における子ども理解に関する評価（園評価）との関連性を分析した。分析に関しては実習成績の推移に着目して、実習評価A→A、C→A、C→Cの3群に分け、各群から学生を抽出し、その抽出学生のノートを質的分析した。本稿は、紙幅の関係上、実習成績の伸びが大きかった学生に限定して分析を進める。

3-3 「子ども発見ノート」の運用の留意点

「子ども発見ノート」を取り組むにあたり、講義のはじめに「子ども発見ノート」を課す意義を学生に理解させた。課題のために「子ども発見ノート」に記録するのではなく、優れた保育者になるために「子ども発見ノート」に記録するということを徹底周知した。県内の短期大学の中では比較的難関である本学に入学したことに対する喜びが冷めない時期であり、保育者になりたい意欲も高まっている1年生の初期に理解させることにより、取り組みの効果を上げる配慮をした。

「子ども発見ノート」の提出に関しては、最低数を前期4回、後期4回とするが、エピソード数は本人の自由とした。提出時期は、原則、保育原理の時間に回収することになっているが、担当教員の研究室にて随時提出することも可能とした。

取り組みを開始し、さらに子ども理解を深めるために、2009年11月に、子ども理解の第2ステージである、子どもの具体的な姿に基づき内面を推測していた学生4名のエピソードを抽出し、プリントとして学生に配布した。他者の記録した「子ども発見ノート」を見ることによって、子どもを見る目が刺激され、自らもそれに近づこうという意欲から、さらなる発見を促し、そこで記述する内容が、第3ステージである保育者としての気づきにつながるように指導した。

4. 研究結果

4-1 学生のエピソード記述における着眼点

保育実習Ⅰ終了後（A期）と保育実習Ⅱ終了後（B期）において、学生の平均エピソード数、発見場面、発見内容を分析し、その着眼点と時期に伴う差異について検討した（図3）。

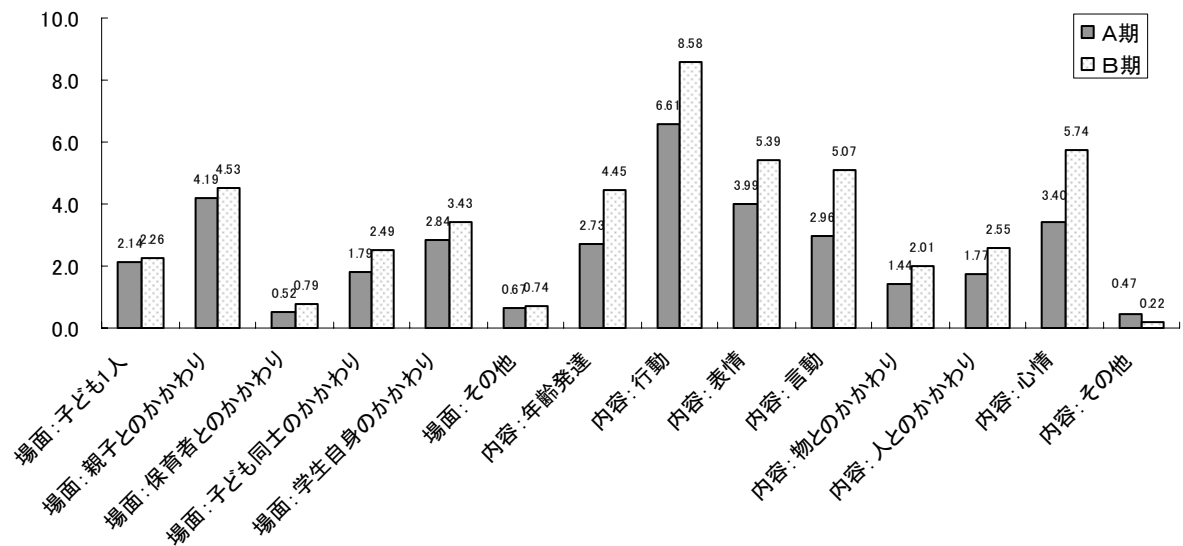


図3：A期・B期におけるエピソードの平均記述数・発見場面・発見内容の差異

まず、年間総エピソード数は3647個（A期：1687個、B期：1960個）であり、それぞれの平均エピソード数を算出した結果（A期：12.5個、B期：13.2個）、時期に伴う大きな差は見られなかった。

また、学生が発見した総場面数（3750個）を分析した結果、①親子の関わりに関する場面、②学生自身と子どもの関わりに関する場面、③子ども一人の場面の順に数多く着目する傾向が見られた。時期に伴う差異を χ^2 検定によって検討した結果、有意傾向が見られた（ $\chi^2(5)=10.6$, $+p<.10$ ）。残差分析の結果、「子ども同士の関わり」に関するエピソード記述数が、A期よりB期の方が有意にプラスであったことから、1年を通して保育現場や街角における子ども同士の関わりの様子に着目する学生が多くなったと考えられる。

さらに、学生が発見した総内容数（6852個）を分析した結果、①子どもの行動、②子どもの表情、③子どもの心情の順で気づきをあげることが多かった。時期に伴う差異を χ^2 検定によって検討した結果、有意差が見られた（ $\chi^2(7)=101.1$, $**p<.01$ ）。残差分析の結果、「年齢発達」「行動」「言動」「心情」に

関する気づきが、A期よりB期の方が有意にプラスであったことから、月日を重ねるにつれて、子どもの発達や行動・言動の様相、内面理解に関する気づきをあげる学生が多かったことが見出された。よって、学生は1年間の取り組みを通じて平均エピソード数が大きく増加することはないが、発見する場面やその内容に変化が見られるようになったことが示唆された。

4-2 時期による発見ノート自己評価調査結果の差異

学生が「子ども発見ノート」を継続的に記述することによる意識変容及び効果に関して、自己評価調査をA期・B期において実施し、その平均得点数をT検定で分析した（表1・2）。その結果、20項目中19項目において有意差が見られ、ほとんどの平均得点はA期よりB期の方が高かった（図4）。カテゴリ別に見ると、特に第2ステージの「子どもの内面への気づき」に関する項目の有意性が全般的に高かったことから、A期で第1ステージの「子どもへの興味付け」を高めた後に、B期では特に子どもの内面理解を深めようとする学生が多かったと推測できる。

表1：A期・B期における自己評価結果の差異（発見ノートによる意識変容）

	1. 子どもへの意識	2. 視野に入る	3. 関わる意識	4. 探究心	5. 発達年齢	6. 興味	7. 行動による内面理解	8. 表情による内面理解	9. 共感	10. テーマ性	11. 多角的視点	12. 自己考察
T比	2.28	2.62	1.78	1.21	3.40	2.60	3.02	2.68	2.02	2.01	2.98	3.41
	*	**	*	n.s.	**	**	**	**	*	*	**	**

表2：A期・B期における自己評価結果の差異（発見ノートの効果）

	1. 書く力	2. 出来事の整理	3. 周囲への意識	4. 周囲への注視	5. 保育職の意識	6. 継続性	7. 有効性	8. 活用性
T比	4.19	2.06	2.78	4.06	2.75	4.53	3.10	3.54
	**	*	**	**	**	**	**	**

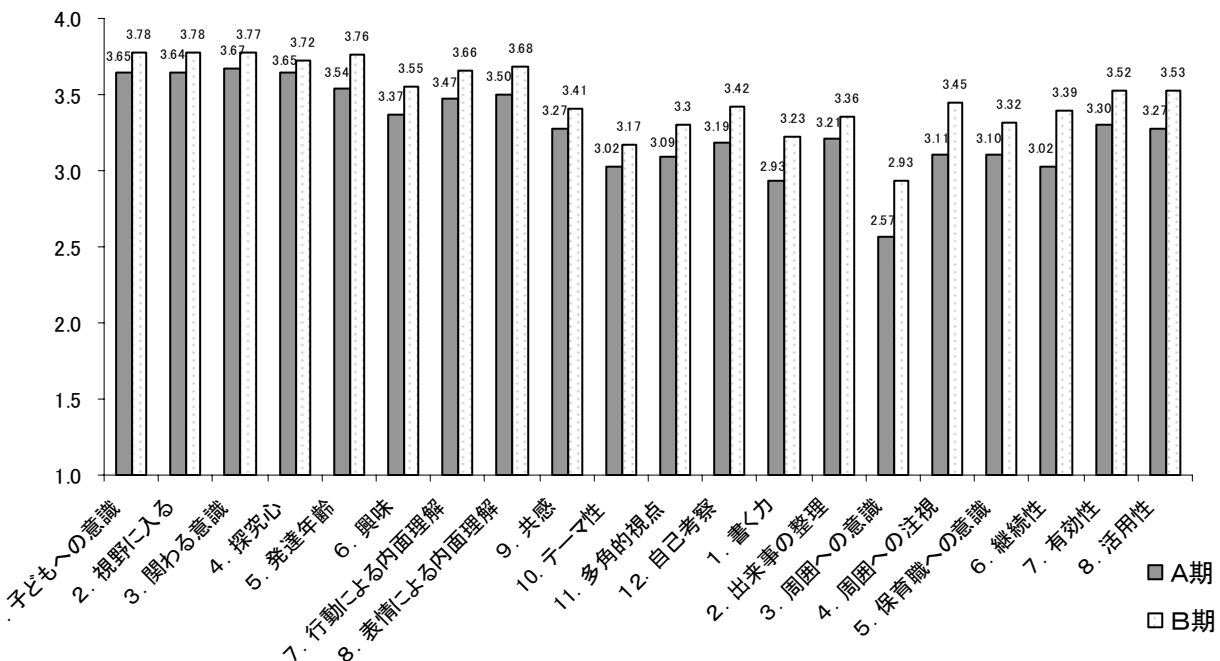


図4：A期・B期における自己評価結果の差異

4-3 実習評価（子ども理解）との関連から

A期・B期に実施された保育実習（保育実習Ⅰ：2009年9月、保育実習Ⅱ：2010年2月）の実習評価票に記された「乳幼児の理解と愛情（子ども理解）」の評価に着目し、子ども理解評価が高かった学生（H群：A評価学生）と低かった学生（L群：C評価学生）を抽出した上で、「子ども発見ノート」の着眼点・質問紙調査結果との関連を検討した。

まず、A期におけるH群（n=36）とL群（n=14）を抽出して分散分析をした結果、「子ども発見ノート」の着眼点に関しては、①年齢と発達、②行動、③表情、④心情に関する平均記述数についてH群の学生はL群の学生より多く（図5）、特に子どもの年齢と発達の関係に着目した記述に関しては有意傾向が見られた（ $F(1,49)=3.92, +p<.10$ ）。また、自己評価結果との関連を見たところ（図6）、関わる意識（ $F(1,49)=3.18, +p<.10$ ）、探究心（ $F(1,49)=2.95, +p<.10$ ）、継続性（ $F(1,49)=4.84, *p<.05$ ）に関して有意性が見出された。この結果から、A期の保育実習Ⅰにおいて子ども理解の評価が高かった学生は、本取り組みにおいて年齢や発達に着目する傾向が強く、「子ども発見ノート」を書くことで子どもに関わりたい・知りたいという意欲が高くなり、今後も継続して子ども理解をより深めたいと考えていることが明らかになった。

同様に、B期におけるH群（n=57）とL群（n=7）を抽出して分散分析した結果（図7）、A期のような①年齢と発達、②行動、③表情、④心情に関する発見内容の平均記述数や自己評価結果において有意性は見られなかったが、⑤遊び（物との関わり）に関する発見内容においてのみ有意差が見られた（ $F(1,63)=4.05, +p<.05$ ）。この結果から、B期の保育実習Ⅱにおいて子ども理解の評価が低かった学生は、子どもの遊び（物との関わり）に着目して記述する傾向があることが明らかになった。

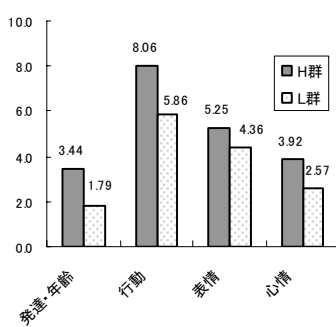


図5：着眼点との関連（A期）

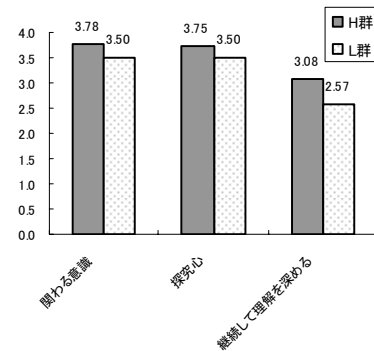


図6：自己評価結果との関連（A期）

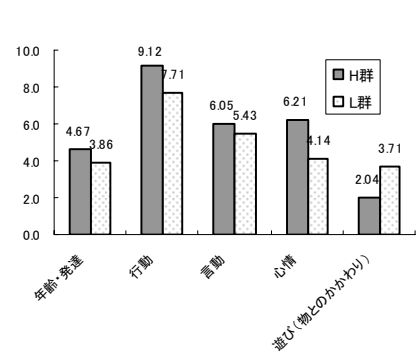


図7：着眼点との関連（B期）

以上の結果から、本取り組みが1年を経過した段階になると、「子ども理解」評価との関連は見られず、全般的に記述の様相や有効性に関する自己評価が高くなったと言える。しかし、この統計学的結果のみで実習現場における本取り組みの効果が乏しいと断言することは難しいであろう。実際に、「子ども理解」の評価のH群は9月の36名から2月では57名に増加したこと、またL群は、9月の14名から2月では7名と半減していたことに注目すると、少なからず学生は実習現場で子ども理解を深めながら、子どもとの関わりを意識していると推測できる。

4-4 質的分析より

そこで、子ども理解の実習評価に応じて、学生のエピソードがどのように変容し、何を学びとっているかという具体的な記述の推移について質的分析を行った。ここでは特に、「子ども理解」の実習評価がA期・B期を通して評価が2段階以上向上した学生の記述に着目し、詳細に読み取りを進めた(表3)。

表3：実習における子ども理解評価が1年間で向上した学生のエピソードから

	発見ノートの記述	読み取れること
4月	<p>【4月18日】 3歳くらいの男の子</p> <p>【様子】 マクドナルドでハッピーセットの景品を持ってはしゃいでいる子がいて、お父さんがその子の手を拭いていた。</p> <p>【感想】 <u>すごく嬉しそうに景品を持って遊んでいて、②すごくかわいかった。</u>①お父さんが子どもの手を拭いているのを見て、私もそのようなことをしてもらっていたのかなあと思った。</p>	<p>①「かわいかった」などの外面的な記述に留まっている。</p> <p>②親子関係に着目しながら、自分の幼少時代の親子関係を回顧している。</p>
9月	<p>【9月18日】 2歳の男の子</p> <p>【様子】 私が実習終了後に日誌を提出して挨拶をしに回っていて担当していたクラスにも行ったときに、男の子が「早く保育園の服に着替えて。」と私に言ってきました。</p> <p>【感想】 私は、<u>②実習中ジャージだったのでジャージにならないと遊んで貰えないとわかったのかなと思います。(スーツで行ったので) ①その言葉を聞いてとっても嬉しかったです。</u></p>	<p>①「分かったのかなあ」など心情を類推している。</p> <p>②子どもが自分に親しみを持っていることを感じている。また、2歳児でも親しみの継続を確認し、喜びを表している。</p>
3月	<p>【3月16日】 小2の男</p> <p>【様子】 児童館実習で初めてであった小2の男の子。児童館に来館してきたので「おかえり」と挨拶すると「うるさい」と初めて会った私には心を開いてくれませんでした。私は仲良くなりたかったので、コミュニケーションを図ったのですが、なかなか受け入れてくれませんでした。しかし、外遊びの時にボールを持っていたA君に「一緒に遊ぼう」と言葉掛けすると「受け合いやろう」と言ってくれました。その後A君から「遊ぼう」と言う言葉を聞くようになりました。</p> <p>【観察し発見したこと】 最初は「〇〇先生は？」と好きな先生にしか心を開かないような言動が見られたため、実習中に仲良くなるのは難しいかもしれないと思っていた。しかし、その子の好きな遊びを通して心を開いてくれたので、<u>②その子の得意なことを好きなことに入り込むことが、仲良くなる近道なのではと思った。</u></p> <p>【保育者としての気づき】 私が仲良くなりたいという気持ちを持ち、<u>①冷たい言葉が言われてもあきらめず関わろうとしたことで気持ちが伝わったのだらうと思う。</u>「僕のことを見ていてくれる。」と感ずることができたのではないかと思う。正面から向き合い気持ちをぶつけることの大切さを知った。また、その子の好きな遊びに楽しみながら取り組んだことでその子も<u>②この人と遊ぶと楽しい</u>と感じてくれたのだと思う。</p>	<p>①子どもを観察することによって、子どもの興味関心を理解することが、子どもとの関係作りにつながることに気付いている。</p> <p>②表面的な言葉の表現のみで判断せず、子どもを丸ごと理解しあきらめず子どもを受容する姿勢を継続することが、子どもの心を開くきっかけになることに気づいている。</p> <p>③遊びの楽しさを共有することで、子どもが(自分に)親近感を持つるということに気づいている。</p>

本学生のエピソードを分析したところ、入学当初や9月頃までのエピソードに関しては、「かわいかった」などの外面のみの感情表記や「嬉しかった」などの自己感情表記に留まっていた様子が窺われる。しかし、9月頃を境に、子どもの言動から内面や発達過程を推測しようとしたり、子どもとの関わりの中で驚きや感動を体験したりするようになりつつある。そして、1年が経過した3月には、実習生としての自分と子どもとの関わりの中で、子どもの心情の動きを類推する様子が読み取れる。このような経緯を通して、内面を見る基本や子ども理解の着眼点の基礎を獲得するに至ったと考えられる。

5. 総合的考察と今後の課題

近年、保育者を目指す学生も様々な状況から子どもと関わる実体験をもつものが非常に少ない。その現状を踏まえ、保育者養成の出発として保育の基となる子ども理解に着目し、1年生から「子ども発見ノート」の取り組みを始めた。その取り組みについては、入学当初の第1ステージを「子どもへの興味付けの期」、第2ステージを「子どもの内面への気づきの期」、第3ステージを「保育者としての視点に立って考える期」と位置付け、子どもの行動や感情に共感し、保育者の視点で子どもの姿に立ち止まって、考え、行動し、保育実践へと結びつくことを期待したいところである。

研究結果に示されたように、エピソード数には大きな差異は見られなかったものの、場面数においては、①親子の関わりに関する場面、②学生自身と子どもとの関わり、③子ども1人との関わりの順に着目が見られ、1年を通して保育現場や街角における子どもの同士の関わりの様子に目を向ける学生が多くなっていることが明らかになった。「子ども発見ノート」が提示されていることで、何気なく過ごす日常の場面においても子どもに目を向けようとする姿勢につながったと推察できる。

また、発見内容に関しては、①子どもの行動、②子どもの表情、③子どもの心情の順に気づきが多く、月日が経つにつれて、年齢発達、行動言動、心情に関する気づきが徐々に多くなった。継続することで発見する場面やその内容に変化が見られるようになったことが示唆され、子どもの姿を深く見ようとする姿勢へとつながったと推測する。

同様に、A期からB期にかけて、内面への気づきに関する自己評価得点に有意差が見られたことから、1年生の後期において、第2ステージの「子どもの内面への気づき」に深まりが見出だされたことが大変意義深い。この「子ども発見ノート」は、入学後半年間においては「子どもに目を向ける」「視野を広く持つ」など子どもに意識を向けるためのアイテムという位置付けであったが、徐々に「書くなか子どもの思いを考え読み取ろうとする」姿勢が構築されてきたのではないかと推測できる。

この1年生後期に見出だされた子どもの内面理解向上の背景には、次の2つの要因が考えられる。まず1つ目に、実習などで子どもと直接的に関わる経験を通して、子どもに対する愛情が深まり「もっと子どものことを知りたい」と思うようになったり、子どもに対する関心が増したりしたことが、大きな契機になっていると思う。「子ども発見ノート」を書くために客観的に子どもたちを眺めていた状況と、実際に心を通わせながら関わり合った状況では、学生の心情においても大きな違いがあり、時には心から感動した場面や思い通りにいかず葛藤した場面もあったと考えられる。しかし、1年生前期に2回（計3週間）及び1年生後期に1回（2週間）の実習を経験する本学の学生にとっては、子どもとの実際の関わりは新鮮に映り、実習後には「保育者になりたい」と夢を膨らませる学生も多かったことから、この感動や葛藤は学生にとって大きな影響を与えたと推測できる。よって、このような保育者へのステージに意欲を高めていくことが、子どもの心情を理解しようとする姿勢につながったのではないかと考えられる。

また、2つ目として、継続することの価値があげられる。自己評価結果においても「子ども発見ノート」を継続することは、保育者になるために大変意義があると答えた学生が多かったことから、いかなる時でも書き続けることで、子どもを見るまなざしに深まりが生まれると言えるだろう。「継続は力な

り」という信念のもとに、2年間この取り組みを継続することで、保育者としての観察眼や洞察力に磨きをかけながら成長していくことを期待したい。

今後の課題としては、卒業までこの取り組みを継続し、2年間という道筋の中でその成果を分析していきたい。特に、実習後の振り返りにおける話し合いや、子ども発見ノートのエピソードについてグループワークなどを通して協議するなど、観察の視点の幅を広くもつことに学生自身が気づく指導を展開していきたいと考える。また、「子ども発見ノート」の記述における言葉や文章などの表現力の向上も図りつつ、子どもの姿や思いを言葉で表現できる感性も同時に高めていきたいと考える。

子どもの心を読み取り、内面を理解することで、子どもの心情に即した保育が可能となるであろう。子どもに対する保育の方法を学ぶ基本は「子ども理解」であることを意識し、この取り組みを継続する中で、子どもの内面理解から出発し、内面に裏付けられた保育実践を目指せる保育者を今後も養成していきたい。

【参考文献】

豊田和子・三宅啓子（1998）「保育者養成校の教育内容・方法のあり方に関する研究 ―その課題と授業方法改善の試み―」高田短期大学紀要，第16号，41-65.

【追記】

本稿では、1～3.を小田が、4.を上村が、5.を山崎が分担執筆した。